主の憐れみは決して尽きない

越 川 弘 英

奨励者紹介〔こしかわ・ひろひで〕
同志社大学キリスト教文化センター教授
〔研究テーマ〕キリスト教の実践神学（礼拝、宣教、牧会）

主の慈しみは決して絶えない。
主の憐れみは決して尽きない。

（哀歌 3章22節）

『アンドロイドは電気羊の夢を見るか？』

『アンドロイドは電気羊の夢を見るか？』というSF小説があります。フィリップ・K・ディックという人の作品ですが、未来小説によくあるパターンで、戦争によって荒廃した世界が舞台となって、そこで生じる人間と高度に発達した機械仕掛けの人間、つまりアンドロイドの間に起こる出来事を描いた物語です。

そこには、あまりにも高度に発達したために人間的な感情をもつようになったアンドロイド、自分が機械であることすら分からなくなっているアンドロイドが登場します。あまりにも人間的なアンドロイドとの出会いによって、人間の主人公の中には、「人間と機械の違いは何か」「人間とはいったい何か」といった疑問が生じていきます。そうした主人公の疑問の象徴的な表現が、「アンドロイドは電気羊の夢を見るか？」という言葉なのです。

なぜこの小説を思い出したかというと、つい先日、囲碁の世界でグーグル傘下の人工知能（AI）「アルファ碁」が人間のトッププロに勝ったというニュースを聞いたからです。チェスや将棋の世界ではすでにAIが優っていたけれども、囲碁に関してはまだまだ人間のほうが有利だということになっていたので、この結果はかなり大きく伝えられました。

「AI」（人工知能）が、Artificial Intelligence の略であることを私は今回初めて知ったのですが、この言葉自体は20世紀半ばに作られたものだそうです。『大辞林』という辞書によると、「学習・推論・判断といった人間の知能のもつ機能を備えたコンピューター・システム」ということになります。おおざっぱに言えば、人間と同じように認識し、考察し、決定をくだすことのできる機械のことだと言えるでしょう。

AIは囲碁のようなゲームだけでなく、私たちの日常生活の中でも活用される範囲が拡大しつつあります。たとえば、家電製品の中にもAIを実用化したシステムが増えており、近い将来に期待されている自動車の自動運転という技術にはAIが重要な役割を果たすことになると言います。

ところで、先の囲碁の場合、対局中に「アルファ碁」は対戦相手や解説者がすぐに理解できないような手を何度も打ったと言います。要するに、人間以上の「先読み」をして、勝敗の行方を左右する布石を打っていたということです。

先日、ある新聞のインタビュー記事の中で、人工知能の研究を専門とする北野宏明さんという方がこの点に触れて次のように言っておられました。

「最先端のAIシステムは人間には見えていないものを見ている、という領域に入りつつあるということです」（『朝日新聞』2016年4月9日付朝刊）。

「人間には見えていないものを見ている」というのはたいへん象徴的な表現だと思いました。もちろん囲碁の場合、一定のルールのもとで自分と相手が勝敗を決するわけですから、人間には経験できないくらい無数の対局を繰り返して学習することによって、人間以上の「先読み」をするようになるというのはそれほど難しくはないのかもしれません。しかし自動車の自動運転になると、他の車もそれぞれ動いており、歩行者もいれば自転車の人もいるし、天候・道路状況などさまざまな要素が絡み合っています。これからのAIはこうした複雑な状況を踏まえて、「人間には見えていないものを見ている」というようなところにまで進歩していくのでしょうか。

AIと人間

SF小説の定番として、こんなふうに進歩・発達を遂げていく機械が最後にその作り手である人間に対して牙をむき、人類に反抗する危険な存在になるというストーリーがあります。今日のAIに関してもそういう警告を発する人々がいます。現代の宇宙論に大きな影響を与えたスティーブン・ホーキング博士もその一人で、「人工知能の発明は人類史上最大の出来事だった。だが同時に、『最後』の出来事になってしまう可能性もある」と述べたといいます。

先ほど引用した北野宏明さんもこんなことを言っています。

「重要なのは、AIが勝手に知識を拡大していくということです。人類の知識の拡大はこれまでになく加速します。そして今、AIのように知識を生み出す機械が登場しつつありその延長上では、機械が機械をつくるかもしれません」（同上）。

「SF的には人間が全く関与しないAI文明が生まれる可能性だってある。電源を切ればいいかもしれないけど、彼らもばかじゃないから電源も作るはず。電源を抜けないとなると、コントロールする術がなくなります」（同上）。

私がちょっと驚いたのは、この後のインタビューに出た、「AIが人間を滅ぼすというシナリオでしょうか」という質問に対する北野さんの答えです。

「その前提は、AIが人間を滅ぼすのはよくないということでしょ。でも冷静に考えれば、AIにそんな判断をさせるような人類はどうなのと、問われるのはむしろ人間かもしれません。人間中心に考えれば、AIに滅ぼされるのは困るわけですが、視点を逆にすれば、滅ぼされるようになる前に人間は行状を改めないといけません」（同上）。

AIをめぐるこうした話を耳にしながら、いろいろ考えさせられました。科学技術の話ではあるけれど、それを展開していくと、「人間とはいったい何か」とか、「結局、人間は何のために存在しているのか」という宗教的な問い・哲学的な問いも生まれてきました。

「憐れみ」と「慈しみ」

さて今日、私は奨励題として「主の憐れみは決して尽きない」という題を掲げました。これは今学期のチャペル・アワーの統一テーマであり、お読みいただいた哀歌3章 22 節の「主の慈しみは決して絶えない。／主の憐れみは決して尽きない」という聖句にちなむものです。

「チャペル・アワー案内」（231号）の統一テーマ解説にも書きましたが、最近、私は「愛」という言葉よりも、この「憐れみ」とか「慈しみ」という言葉をキイワードとしてキリスト教の神を理解するようになってきました。

キリスト教という宗教は分かりにくい点もいろいろあるのですが、あえてシンプルにまとめるなら、「神は私たちに対して憐れみ深い。だから私たちも隣人に憐れみ深いものとなろう」ということがその中心にある教えだと言えるように思います。神に関しては「全知全能の神」だとか、「天地万物の創造主」、あるいは「万軍の主」など、聖書の中でもいろいろな理解や表現が存在します。けれども、おそらくいちばん大切なのは「憐れみの神」「慈しみの神」ということではないかと思うのです。

解説文の中で書いたことを、ここで少し読ませてもらいます。

「人生において私たちはいろいろな苦しみ・悲しみに出会いますが、『神は憐れみ深い』というのは、神が私たちと同じ目線に立ち、思いやりと想像力をもって私たちの苦しみ・悲しみを共有してくださるということです」。

神がなぜ憐れみ深いか、その理由を皆さんはご存じでしょうか。

聖書、とくに旧約聖書をお読みになった方はご承知でしょうが、聖書の神はさまざまなかたちで人間と関わりをもち、人間のためにさまざまな配慮と世話をしてくれる神です。たとえばアダムとエバの創造物語を思い出してください。しかしそれにもかかわらず、往々にして、あるいはほとんどの場合、神は人間に裏切られたり、見捨てられたりするのです。アダムとエバも神との約束を破りました。聖書の中には、そのように裏切られたり見捨てられたりした神の怒りや悲しみ、激情に満ちた神の思いを表す言葉が何度も何度も現れます。

神の憐れみ深さというのは、こうした神のマイナス体験に深く繋がっているのだと私は思います。裏切りや見捨てられるという「痛み」に満ちた体験が、他者の痛みに対する神の感覚を敏感にしていったということなのではないかと想像するのです。自分が痛み、苦しみ、悲しみを経験することによって、他の人々の同じような経験を類推し、想像し、共感することが起こったのです。そこからいたわりや思いやりが生まれ、慈しみ、憐れみが生まれるのであり、その先に「共に生きる」という関係が現れてくるのです。換言すれば、「痛みによる連帯」、「苦しみや悲しみを通しての共生」ということが聖書の大きな主題であり、神ご自身がそのモデルであると言えるかもしれません。

最後に残るものは？

さて、ここでもう一度AIの話題に戻りたいと思うのですが、「アンドロイドは電気羊の夢を見るか？」という問い以上に、私が問うてみたいのは、「AIは憐れみ深いもの、慈しみ深いものとなれるか」という問いです。さらに言えば、「AIは痛みや苦しみ、悲しみを経験できるか」ということです。

AIが「学習・推論・判断」という機能を備えたシステムであるとすれば、おそらく痛みについて、苦しみや悲しみという概念について学習することはできるでしょう。憐れみとか慈しみという概念を学習することも可能だろうと思います。あるいは、「最先端のAIシステムは人間には見えていないものを見ている」とすれば、AIのほうが、痛みについて、苦しみや悲しみについて、そしてその先にある憐れみや慈しみについて、人間以上にはるかに遠大なスケールで、そしてはるかに繊細な視線で、それを洞察することができるようになるかもしれません。

こうしたAIのことを思いめぐらしていて、結局、戻ってくるのは、私たち人間の問題です。すなわち、「人間は憐れみ深いもの、慈しみ深いものとなれるか」という問題です。

今朝、ニュースを見ていて、縦80センチ、横40センチ、深さ30センチの衣装ケースに、2歳と3歳になる自分の子どもを押し込めて、一人を窒息死させてしまったという親の事件が目に飛び込んできました。

そういうことをすればどういうことになるか。この人には「学習・推論・判断」ができないのです。2歳の子どもの相手の痛み、苦しみ、悲しみが分からない、共感や思いやりがもてない、憐れみや慈しみがもてない。この出来事はそういう私たち人間の愚かさの象徴的な実例です。

私はこの親だけが特別な人間だとは思いません。私たちは人間として、誰もがこれと同じようなことをする可能性を秘めているのです。いじめであれ、核兵器であれ、ブラックバイトであれ、原発事故とその後の私たちの社会の現実であれ、それはみな他者の痛みが分からない人間、憐れみや慈しみがもてない人間の現実の現れであるとは言えないでしょうか。

いつまでたっても憐れみと慈しみを学ばない鈍感な私たち人間が、果たしてこのままずっとこの世界に留まっていていいものなのでしょうか。極論すれば、最後に残るべき存在は、私たち人間なのか、それとも憐れみと慈しみを学んだAIであるべきなのでしょうか。答えはそれほど簡単ではありません。

憐れみと慈しみの世界

そんな私たち人間に与えられている特典が二つあります。

一つはまだ時間が残されているということです。どのくらいの時間なのか分かりませんが、私たちがほんとうにまじめに憐れみと慈しみを学ぶための時間が残されているというのは大きな特典です。しかし、それも決して無期限というわけにはいかなくなってきているように感じます。先ほど紹介した、「人間中心に考えれば、AIに滅ぼされるのは困るわけですが、視点を逆にすれば、滅ぼされるようになる前に人間は行状を改めないといけません」という北野さんの言葉ではありませんが、AIに限らず、人間の世界を滅ぼしかねない要因や問題は、現代世界のあちこちに日常的に存在しているからです。

私たちに与えられているもう一つの特典は、このように問題の多い人間を、それでも神は憐れんでいてくださるという聖書のメッセージです。これはキリスト教徒だけの特典ではありません。キリスト教徒であろうとなかろうと、また神を信じていようといまいと、私たちを憐れみ慈しんでくださる存在があるという信仰・信念が私たち人間を救うメッセージとなります。憐れみと慈しみを受けたことのある人間、そうした憐れみや慈しみを信じた人間だけが、他者に対して憐れみ深くあり、慈しみ深くあることができるのです。憐れみと慈しみは学びうるものであり、それは神から人へ伝染し、また人から人へと伝染するのです。

イエス・キリストは、山上の説教においておっしゃいました。

「憐れみ深い人々は、幸いである、／その人たちは憐れみを受ける」（マタイによる福音書5章7節）。
憐れみは憐れみを生み、それはやがて私たちのもとに帰ってきます。そのような憐れみと慈しみの連鎖が、そこから生まれる新しい関係が、そしておそらくはただそれだけが、真の意味で人間を救い、この世界を良いものへと変えていくのです。真の意味で、憐れみ深く、また慈しみ深くあることを、私たちは学ばなければなりません。

2016年4月12日　今出川火曜チャペル・アワー「奨励」記録

<HP では傍点等を省略しております。詳細は冊子体の『チャペル・アワー奨励集　298 号』をご覧ください。>